



： 卷 頭 言 ：

緊張感で臨む 真剣勝負の場

・ ・ 適用性試験成績検討会 ・ ・

(財)日本植物調節剤研究協会 会長 小川 奎

10月下旬から師走にかけて、植調剤に関する各分野・地域の適用性試験の成績検討会が続く。検討会では、試験担当者は緊張感を持って臨み、委託メーカーはそのデータや実用性の判定に大きな関心を寄せる。それぞれのデータや判定の妥当性について、学識経験者である専門委員、試験担当者の面々、委託メーカーを交えながら、熱い議論が沸騰する。一年の総決算に相応しい、まさに真剣勝負の場になっている。

適用性試験は、試験設計や狙いが既に決められている。一見、楽そうな試験ではあるが、設計通りに実施することは、思いの外、難しい。設計に沿って行っても、試験場所での土壌や気象、雑草の発生量や種類、あるいは作物の品種などが異なれば、供試剤のパフォーマンスは複雑に揺れ動く。

適用性試験とは、供試剤に期待される効能をそのまま実証することではなく、一種の耐久性試験でもある。実際の使用場面に適用できる薬効の高さ・広さ等の安定性や、薬害のリスクの限界といった未知の部分を明らかにするもので、より注意深い観察や考察が求められる。

試験結果は数字で表わされるデータと観察の記述からなる。一般にデータは客観性が高いと

思われ、科学的根拠とされる。しかしよく考えてみると、大半のデータは、サンプルの値で、それもあの一瞬を計測した値に過ぎない。従って、試験担当者が試験経過を通して観察し、その剤の持つ特徴を浮き彫りに出来る状態（達観）を、巧みにデータとして表現するには、サンプリングの仕方とそのタイミングが大きな鍵となる。データの取り方にこそ、研究者としての力量が問われる。

オープンフィールドの試験では、圃場ムラによる区間のフレや試験区内のムラの問題を、どう克服するかが大きな課題である。均一な圃場条件を確保するための準備は言うまでもないが、想定外のフレが生じた時の対処の仕方も腕の見せ所となる。

試験圃場全体が均一な状態であれば、無作為抽出から得た平均値は、集団あるいは試験区を代表する値として意味を持つが、双方の値がかけ離れている2区の平均値は、そもそも均一性に問題があるので、両者を同じものとして扱えない。

このようなフレが生じたケースは、通常は再試験が妥当であるが、このフレを生んだ要因が具体的に解析、あるいは過去の事例や経験から

推測できれば、貴重な試験事例として生かせる。しっかりフォローしたい。このように、責任ある判定、あるいは試験全体に対しての见解を明確にしてこそ、はじめて適用性試験は完了する。

検討会で、成績書のデータや字句の修正が相次ぐことがあるが、真剣勝負の会議に水を差し、試験そのものの信頼性を損ねかねない。とは言え、校書掃塵；いくら塵を掃って完全に取りえないように、いくら校正しても、ミスは完全に無くすことは難しいこともあり、ある程度のミスは寛容せざるを得ない。しかし、この言葉は校正ミスを無くす努力を怠ってはならないという戒めであり、成績書提出前に複数の者でチェックするなど、その甘さを何とか克服したい。ま

た、概要書と本成績書の提出期限の余裕の無さやそのギャップも、担当者に負担を強いている。事務局に対しても概要書と本成績書を電子的に一体化したシステムの構築など、効率化に向けた工夫を望みたい。



決定的瞬間の撮影に成功
(豪州 ケアンズ・トロピカル・ブーのバードショー)